

記念すべき第25回総会・懇親会 互いに声をかけあって集まろう！

6月25日

山川静夫氏(67期)の興味深い

午後6時～

お話も——ぜひ楽しみに！

静中・静高 関東同窓会 会 報

静中・静高関東同窓会
会報 第47号
平成11年6月1日発行
編集人 上 杉 重 吉

平成十一年度 関東同窓会総会・懇親会

日時・六月二十五日(金) 午後六時より

場所・東京都千代田区神田駿河台三一十一

新日本証券 地下一階食堂

電話〇三三二一九一三五三三

会費・五千元

年会費の三千元は当日受付けもいたしますが、この会報に同封の振込用紙によりご納入をお願い申し上げます。議題・平成十年度事業報告、会計報告。平成十一年度事業計画、予算。その他

山川静夫氏のお話

引き続き 懇親会

●今回の当番幹事は

77期の方々。皆で

協力しましょう。

しめきり：

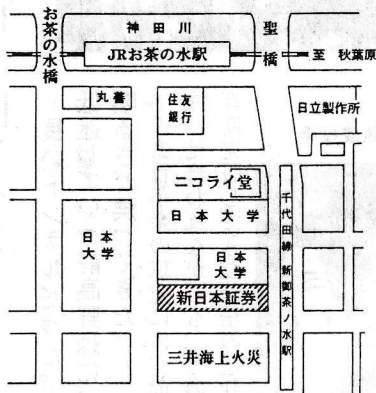
六月十五日

同封はがきに50円

切手を貼付して、

出欠と近況を至急

ご連絡ください。



Ⅱ各期幹事一覧Ⅱ

幹事が変更の場合は事務局までお知らせください。特に幹事未定の期は至急選出してご連絡を！

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---------|---------|--------------|---------|---------|--------------|---------|---------|--------------|----------------|--------------|---------------|--------------|---------------|-------------|-------------------|---------|------------|-----------------|---------|--------------------|-------------------------|--------------|---------------|-----------------------------|--------------|--------------|--------------|---------|---------------|-------------------|---------|---------|---------|--------------|---------|---------|---------|--------------|--------------|------------------|--------------|---------|---------|---------|--------------|---------|--------------|---------|----------|
| 43：西沢純三 | 44：高橋真一 | 45：鈴木弥門・田附敏三 | 47：杉山栄一 | 48：原崎進一 | 49：菅沼 栄・杉本久敏 | 50：丸尾文治 | 51：佐伯正剛 | 52：服部雅雄・廣川 聰 | 53：奥野 孝・月見里得知郎 | 54：居初良雄・柴崎芳三 | 55：相川富士雄・法月重雄 | 56：清水逸郎・萩原達雄 | 57：岩井平一郎・影島利邦 | 59：青木静男・原 淳 | 60：上杉重吉・堤 崇・山本雅之助 | 61：大石次男 | 62：63：木下景一 | 64：65：野沢正憲・渡辺素夫 | 66：田中俊男 | 67：朝比奈正三・梶原由三・成岡英彦 | 68：高橋俊見・荒谷じつ子・大川庄治・雨宮明生 | 69：宮崎吉英・山本龍男 | 70：大高源之丞・大長 智 | 71：児玉文男・後藤弘枝・海野幸雄・篠原 直・浦田 彰 | 72：桜井亮介・深田 均 | 73：山中博司・山梨由記 | 74：佐藤鐘司・藤原経史 | 75：後藤正義 | 76：酒井孝太郎・鈴木 浩 | 77：野方重人・三浦位通・清水雅尚 | 78：鈴木藤男 | 79：上田尚亮 | 80：吉野卓史 | 81：鈴木素明・萩原英昭 | 82：堀内淳司 | 83：山本雅敏 | 84：浅川祥子 | 85：池田幸司・深津俊郎 | 86：成岡和美・井出慎吾 | 87：粟科名雄・石川嘉和・高橋宏 | 89：鳥巢 修・新村暢宏 | 90：荒井千明 | 91：村松秀明 | 92：山野直文 | 93：岡村幸彦・大羽章弘 | 94：松野敦子 | 96：奥田規之・細沢 優 | 97：藤森 尚 | 107：小泉輝武 |
|---------|---------|--------------|---------|---------|--------------|---------|---------|--------------|----------------|--------------|---------------|--------------|---------------|-------------|-------------------|---------|------------|-----------------|---------|--------------------|-------------------------|--------------|---------------|-----------------------------|--------------|--------------|--------------|---------|---------------|-------------------|---------|---------|---------|--------------|---------|---------|---------|--------------|--------------|------------------|--------------|---------|---------|---------|--------------|---------|--------------|---------|----------|

◎一年一度の総会へご参加を！

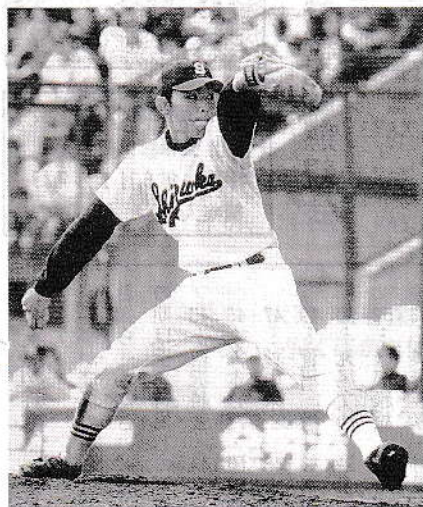
各期幹事のご協力を期待！

静高校歌にOBら万感

五千人の静高応援団に揺れた甲子園スタンド！

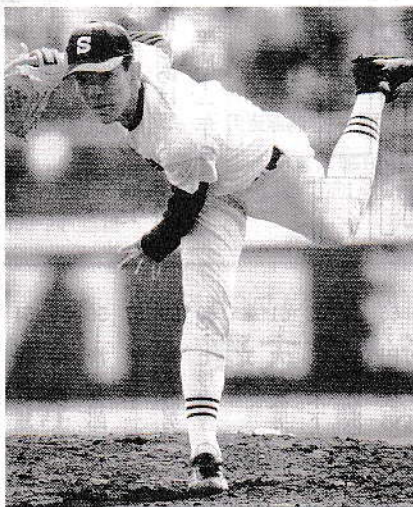


対日南学園戦
先発した市川治由投手



熱投

対柏陵戦
完投した高木康成投手



長いトンネルだった。
低迷していた静高野球に、
明るさが戻ってきた。
過去百年余の球史には、危
機に見舞われながらも、その
都度克服してきた伝統の甦り

があった。歴史の節目に立ち
現われる不思議な力である。
「非常時には、非常の
才が浮上する」
史上最初にその才が浮上し
たのは、大正15年全国制覇の
チーム、ことにその立役者・
福島鏖である。静中・静高野

19年ぶりに
歓喜の校歌斉唱！

〔本47号にもP.4（原崎氏）P.7（倉澤氏）および
P.11（久澤氏）などに校歌等の回想が—必読！〕

球の神話が誕生し、以降「聖
地・甲子園」への巡礼の旅が
始まった。
今年のチームは、投手力を
除けば、際立つものはない。
いかにすれば負けないか、そ
れにはミスを最少限に喰い止
めること。これを目標に「危
機予知能力」を個々に養うこ
とを、地道な精進とした。予
選の失策記録は32出場校中、
部員数とともに、最も少ない。
小才が集まり、一つの力となっ
て浮上した。
甲子園での戦い振りが、今
後の試金石となる。どんな展
開を見せるか。
対柏陵（千葉）戦。初回か
ら劣勢に立たされる。左腕・
高木の球種を看破されていた。
直ちに内容を変更。以降相手
打線は沈黙する。柏陵は前半
のリードで安易に走り、雑な
対応になり、無為の繰り返し
であった。静岡は、着実に加
点、延長13回を強攻策で制
し、十九年振りの「甲子園で
校歌」を実現した。
このゲームの経緯は、これ
までの静高にない、執拗な取
組みに終始する。ミスもなく、
守り抜くチームの特徴を十分

快音

対柏陵戦 13回表無死一塁、杉山が左翼線に二塁打を放ち、決勝点となる。



發揮できた好試合であった。対日南学園(宮崎)戦。相手投手の、低目にコントロールされた好投に抑えられた。懸念されたバッティングも脆さを露呈。二本立ての投手起用に目処のついたことが、唯一の収穫であった。

夏への期待は高まる

しかし、戦後5回連続出場に挑戦し、2回実現したのみだ。昭和40年春の準々決勝まで進出した最強

のチームでさえ、失敗している。独特の雰囲気のある夏を切り切るには、体力、気力、そして知力の充実が不可欠である。自分たちの慢心と戦い、爽やかな中にも、筋金入りのチームとなって、プレーしてくることを望みたい。

(67期 法月郁雄)

〈写真提供・スポーツニッポン社〉
〈協力・静岡新聞社〉

静岡・静岡野球定期戦

四月二十九日、伝統の第41回定期戦が両校応援団や大勢のOB・父母らが詰めかけた静岡球場で行われた。

センバツで19年ぶりの白星に貢献した左腕エースの高木は6回から登板、4イニングを6奪三振で無失点に抑えて

静岡が6-2で快勝。対戦成績は静岡の25勝16敗(戦前からの通算は静岡の27勝22敗)になった。

静岡 200 000 000 000 2
静岡 010 200 300 X 6

なお現役戦に先立って行われたOB戦では、甲子園出場の往年の名選手らが登場し、スタンドを沸かせた。試合は11-10で静岡OBが勝った。

今夏の甲子園出場も楽しみに！

野球部はもとより、教育活動や部活動など母校の発展に注目し、皆で後援しよう。

その後の同窓会活動

(平成10年12月・11年4月)

◇第18回印高会ゴルフ会

10年12月1日(火)
箱根カントリー倶楽部
参加者：23名
優勝：神谷武男(64期)

(P12に喜びの記)

2位：天野 昭(61期)

3位：宮代美佐子

◇役員会

12月17日(木)

会報46号、15日に出来。

12名出席し、協議。

第52回「江の島会」

総会開催のお知らせ

昨年は夫妻同伴4組を含む50名が参加され、いつもにも増して和やかな雰囲気で開催されました。今年も総会を次の要領で行ないますので初参加の方も多数ご参加下さいませ。

一、九月五日(日) 正午開会

必ず案内を差し上げます。

一、江の島 恵比寿屋旅館

一、連絡先 江の島会事務局
59期奥沢徹(勝山塗装内)

TEL 〇四五三〇一五五四五
FAX 〇四五三〇一五五五七

なお、詳細は例年通り八月上旬頃ご案内を発送しますが、初参加の方は期別、住所、氏名、電話番号を早めに事務局迄連絡下されば

必ず案内を差し上げます。

必ず案内を差し上げます。

〈静岡だより〉

「駿府匠宿」オープン

丸子路といえば、静岡一岡部間を結ぶ旧東海道の要所として名が知られていますが、ここに新名所が出来ました。

この四月十五日オープンした「駿府匠宿」で、静岡市の伝統産業と歴史をテーマにしたアミューズメントゾーン。生活文化を見たり体験したり、目的に応じた楽しみかたが出来るということです。

施設は「駿府工芸館」

「体験工房」「ギャラリー&ショップ」などで、遊ぶ、観る、が体験できるスペース。伝統工芸品が展示されています。「体験工房」では、塗り物、竹千筋、陶芸など作ることが体験でき、「ギャラリー&ショップ」は地場産品を中心に展示、静岡の工芸品・民芸品・海産物などを販売する「鞆子楽市」も楽しめます。

(67期 光木 徹)

同期会 など

五 一 期

関東地区に在住している同期の友が平成十一年四月十三日に四谷のスクワール麹町の宴会場に集まった。われわれのクラスは静中51回卒業であるので、それにちなんで「五一会」(こいちかいと読む)と称している。

今日の出席者は十一名であり、静岡から狩野安彦君が特別参加した。広瀬毅君の名司会振りで楽しくも有意義な一時を過ごした。この歳になると大抵は八十歳を越えているのでどうしても健康上のことが話題になるが、広瀬毅君はゴルフに励んでいるとのこと。寺尾利男君のアラフラ海真珠取りの船団長の話は初めて聞く体験談、佐伯正剛君の席上俳句の

披露などこの会合ならではの興味深い発言があった。久しぶりの出席者は森弘君だが、腸の疾患で闘病中とは思えない元気さであった。

今日の会合の中で森弘君の話が強烈な印象を与えた。戦時中、戦地のボルネオで終戦間際の八月、たまたま静中同期生の海軍予備学生出身の海軍少尉寺島肇と出会った。森



弘君は海軍主計大尉だったが、現地の隊長会議で彼がこの土地に勤務していることを知った。寺島肇少尉はリーダーの隊長であったが、会議終了後の帰路、雨の降る中、敵陣に近いジャングルの中で大声を出してはいけないという場面で、二人の口から自然に出てきたのはあの「岳南健児一千の……」で始まる校歌であった。禁止されていたがつい大声で歌ってしまったこの時が、何とも言えない感激の一時であった……。今思い出しても涙が出るし、あの寺島君はもうこの世にいないのが残念だが、何時になっても静中の校歌は良いもので忘れられないという心温まる話であった。

今年の春の甲子園野球では一回だけだが「岳南健児」の勝利校歌が流れたことは記憶に新しい。最後に一同で校歌を一番から四番まで声高らかに歌い再会を約して解散した。当日の出席者は写真の前列左から森弘、鈴木忠男、広瀬毅、高橋達郎、渡辺功、後列左から佐伯正剛、玉越俊一、寺尾利男、狩野安彦、林盛次、原崎郁平である。(原崎郁平)

六〇期

われわれの同期会は、毎年一回、四月開催が定着してきたが、今年も四月十六日、午後六時から、静岡駅前の日興会館、鳳凰の間で開催された。

この日は快晴・無風の好日、久しぶりに賤機山に登ってみようと思いつき、早目の新幹線で東京を発った。浅間さんの百段を登るのは、何年振りのことだろう。昔は一気に駆け上ったものだが、今やそんな芸当は不可能で、ときどき一息入れながら、ようやく百段を登り切った。

尾根づたいの山道は、道の両側を木立にさえぎられて、見晴しは今一つだったが、山頂の戦災犠牲者慰霊塔にたどりつくくと視界は一転、素晴しい眺望が開ける。見渡すかぎり市街地が広がり、駿河湾のかなた、はるかに伊豆の山々も望見された。

われわれの静中時代には、視界の半分以上は一面の田圃



で、緑町の私の家の前を流れる小川には目高や小鮒が泳いでいたし、夏の宵は夕涼みの親子連れが浴衣がけで螢狩りを楽しんでいたものだ。

同期会参加者は、県外から鳥取の岡本正信君ほか十名、静岡県内四十二名の総勢五十三名であった。

会は幹事の才茂譽英君の司会進行で始まり、まず昨年秋季亡くなられた平石利夫君のご冥福を祈って一分間の黙祷、つづいてサイパン島の慰霊活動に永年尽力された秋田新隆君が、今年ハワイに移住することになったとの報告があり、秋田君からも現地の強い要請を受けて、思い切って永住覚悟でハワイに行くことにしたと、決意のほどが披露された。

今年は久しぶりに、諏訪卓三先生も出席され、八十九歳のご高齢とも思えぬ元氣なご挨拶をいただいた。つづいて横浜から参加の小林金次君の音頭で乾杯、歓談に入った。今年も卯年で昭和二年生れは年男だ。還暦を迎えたのは、ついこの間のように思われるが、あれからもう十二年が経

つ。七十を過ぎれば、あちこち不具合な個所も出てくるが、その割にはみんな元氣で明るく、屈託もない。人それぞれに役割・責任を果し終えて、今や悠々自適の境地というところだろうか。

アルコールが廻るにつれて、次第にオクターブも上がり、みんな童心に帰って、思い出話に花が咲く。

今年一番の嬉しい話題と言え、十九年振りの春の選抜出場だが、甲子園のスタンドで、「岳南健児」を唱う感動を味わった朋友も何人かいたようだ。

予定の時間はまたたく間に過ぎて、八時を廻る頃、杉本武君の音頭とりで、「岳南健児」の大合唱、三番まで進んだところで、四番は上杉重吉君が引継いで、無事完唱、めでたきお開きとなった。

終りに一言。来年は入学六十年、卒業五十五年の節目の年になる。同期の皆さん、四月十四日のクラス会（会の冒頭才茂幹事から発表あり。）には万障繰り合せて集まりましょう。

（堤 崇）

六四期

平成十一年の新年会は一月二十二日、千石会館に、昨年より二名多い十人の仲間が集い開催した。出席者は新井彰、栗田行雄、佐野旭、名波倉四郎、仲野實、永田進一、野沢正憲、長谷川直和、益頭尚文、村上喜代二（50音順）。

村上君の挨拶、乾杯の音頭で開宴、息子の結婚披露のめでたい話から始まって、旅行、ゴルフ、美術、また、野菜栽培や健康問題等時の経つのを忘れる楽しい集いであった。

なお、病気で出席できなかった友人たちが、次回にはぜひ元氣な姿を見せてくれるよう祈ってやまない。

●春のゴルフ会

四月二十日、静岡と合同で次の愛好家十八名が富士宮のゴルフ場に参集した。

伊藤剛、石原良昭、漆畑茂、漆畑輝夫、小澤義郎、風間政彦、神谷武男、川口實、佐野旭、鈴木高保、時田勝博、永田進一、野沢正憲、蛭川博之、増田誠男、村上喜代二、山本和彦と、61期の大石次男兄。

お互い年齢のせいか、飛距

七三期

離が出ず、全体にスコアは余り良くなかったが、何よりも楽しくラウンド出来たことと、パーティーで昔に還って談笑するのが嬉しい限り。

優勝した小澤君は「花づかれゴルフコンペに富士笑顔」と一旬披露、準優勝増田君、そして漆畑君がブービー賞を手にした。

次回には新しい級友も誘うことを約して、黄金色に輝く富士を背に東と西に別れた。

（野沢正憲）



昭和三十二年に卒業してもう四十二年余。皆還暦を迎えて六十歳となりました。卒業して十三年たった頃、たまたま朝日新聞に載っていた静岡・静岡の関東同窓会の初会合の案内を見て、当日、日比谷の会館に出かけて行ったが、エレベーターの中ですぐ級友を見つけた。この級友がテニスの川口君（現、山中博司）だ。小生も柔道部にいたから彼も小生を見て、微笑んでくれた。

この初会合に参加していたのは七名であったと思う。卒業以来会う事も無く、皆懐かしき嬉しい限りであった。早速お互い知っている級友の住所を集めて名簿を作り関東にいる73期の会を結成しようと決まった。

当日出席していた中西英一君に初代の会長になってもらう。二代目は杉山光君、三代目は山中博司君である。

一年ごとの幹事を数名決め、同期会を開催して旧交を温め更に同期生の消息を求め、会員を増やしていった。皆の努

力で会員名簿も充実し、すぐに百名を超える同期会になった。現在では百三十五名の同期の会員がこの静岡・静岡東同窓会に参加して、一番会員の多い期となっている。

これは古井君（残念ながら故人となったが）を始めとして皆が熱心にこの静岡での級友の会を大切に将来のためにも広く厚い友情の場にしようとの努力の賜物である。

ゴルフの会では静岡を始めとする同期生と共に恩師の平岩先生を招き親睦を深め、数年に一度は、73期の同期会を開催してきた。この様な会の運営の最も大切な事は同期生は精神的にも金銭的にも皆平等であるということ、この点については最初から今日まで一貫して守り通して来た。それだからこそ皆が集まってくる。その年、幹事にあたった人は同期会を開催する度にパーティー代その他、以前は二

千円ずつ現在は三千円ずつ静岡東同窓会に会費を拠出し続けて来ました。不参加者の振り込みもあります。特に現在の静岡・静岡東同窓会の財政が逼迫して窮地に陥っているとの役員会での報告を受けて73期の関東在住者にその旨の文章を送り同時に同期会を開催して参加者五十一名と同期会に参加出来なかつた方々三十八名を合わせて八十九名の会費を納付出来ました。別項をご覧下さい。納金下さった方々にも感謝いたします。今までも公私に亘り貴重な出会いの場でありましたがこれから定年退職になった人を含めてお互いの六十年の豊かな知識と知恵と経験を活かして共に健康で親密な会になるものと信じます。（山梨由記）

静岡・静岡テニス部 関東OB会

67期 児島 英男

恒例になってまいりましたテニス部OB有志の集いが、平成十年十月三十一日（土）秋晴れの下、明治神宮外苑テニスクラブで、清水汪先輩の叙勲のお祝い会も兼ねて行なわれました。

清水先輩の若々しいプレーは勿論のこと、いつも美しいフォームで見事なテニスをする大地不二雄君、女子プレーヤーの計良知子さん、静岡か

ら、テニス部の部長を永いこと担当され、インターハイの優勝など戦後の静岡テニス部を導き、黄金時代を築かれた鈴木俊朗先生（生物）はじめ多数の参加を得て、盛大なテニス会になりました。



夜は神宮前のルナ・アンジェロで懇親会。去る九月十日にご逝去された54期山田幸作先輩を偲んで、全員で黙とうし、宴会に入った。清水先輩から祝賀会のお礼の言葉があり、イタリア料理とワインで、夜の更けるのも忘れ、昔話に花が咲き、本当に楽しい一夜を過ごすことが出来ました。最後は、陰山正敏君の音頭で「岳南健児」を合唱、次回の

再会を誓って散会した。

なお、会場等のお世話を毎回お願いしている山中博司君に心より感謝します。

当日の参加者……鈴木敏朗先生、清水 汪（59期）、柴田克朗（63期）、家本 豊（63期）、児島英男（67期）、立花雅二（68期）、柳沢 学（68期）、増井正敏（68期）、笠井耕一（69期）、大地不二雄（70期）、川端正良（70期）、山中博司（73期）、大地千秋（76期）、川口隆史（78期）、陰山正敏（80期）、計良知子（82期）、成岡和美（86期）

一つの小さな輪から

93期 大羽 章弘

異業種交流会ということをよく聞く。関東在住の静岡OB諸氏に呼びかけ、集まれば、そのまま異業種交流会ができるのではないかと、平成七年春のことだった。

同期の岡村幸彦君、95期の菊入弘行君、91期土屋佳子女史、92期武田雅子女史が中心となり「第一回静岡高等学校新東京同窓会」と銘打って、同年5月20日、大手町にて80期から108期までの各界で活躍されているOB諸氏36名が集まり実現に至った。86期の東京大学教授の伊藤元重氏の発足記念講演から始まり、大盛況のうちに会は

盛り上がった。

あれから、内外共にいろいろあり、4年の月日が流れてしまったが、「第二回静岡新東京同窓会」は本年3月13日、新宿三井クラブに59期から107期と、三世代にわたって総勢41人が集まり、第一回と同じくキャスターである土屋佳子女史の名司会で、政府経済戦略会議やテレビのコメンテーターとしても活躍の伊藤元重氏の講演を行ない、あつという間に時間が過ぎていった。関東同窓会の奥沢徹会長、上杉重吉副会長、また理事などの諸先輩方が駆け付けて下さった。3時間の会で場所を二次会に移しても大半が参加、久しぶりの旧友の集まりはこの後も延々と続いたのであった。

ひとりひとりのご協力を！

。総会や同期会などの会合には億劫がらずに出席し、楽しい一刻を持ちましょう。

。年会費の拠出者が年を追って減少し、さびしいことです。関東同窓会の運営も難しくなってきました。

年会費三千円の送金を、至急よろしく願います。

回想・随感など

私の通信簿

43期 倉澤 栄吉

表紙は単純である。横十七センチ縦十七センチほどの上半部に、通信簿とだけ印刷してあり、下半部は二重の枠の線の中に、静岡縣立静岡中学校生徒と印刷し、その左に個名（私の場合はインキで倉澤榮吉と自書した、下手な字が不揃いに並んでいる）を記す空間がある。空間の次は、第一學年から始まって第五學年に至る五つの縦枠、各枠毎に所屬の組名を書く欄がある（私の場合は、第一學年乙組、二年は丙組。以下三年が甲、四年は丙、最終學年も丙組であった）。当時は「岳南健児七百の」と校歌にあつて、甲、乙、丙の三組が同一の學年であるから、一クラス五十人以上すしづめの時代であつた。

成績が甲乙丙丁方式の時代に組名も成績と同じ文字遣いにしたのだから、甲組はいいが、丙の個名には劣等感が伴

わなかつたのが、今思えば不思議でもある。私達は運動会などに、

クラスの応援歌を歌っていたが「浅間サンノ神主ガ オミクジ引イテ言エルヨウ イツモ二丙ハ勝ち勝カッチカチ」と無邪気な高声をあげていたのであつた。

表紙裏には、保護者名と印鑑、その下に保護者代理人、印鑑の欄がある。その次の欄が級監印鑑で、私の場合、一年生が中野先生、二年若米地、三年澤、五年中村の各先生の印が押してある（第四學年の印が押してないのは何故だろう。担任は伊藤先生で成績表には捺印がある）。

通信簿の内容は、三つの部分に大別される。第一部が、静岡縣立静岡中学校生徒心得、交友會規則、修學旅行費給付規程の三章からなる印刷の文言である。第二部は通信欄、今日で言えば届にあたる（例えば、一年生の時には、六月十三日に、病氣ノ為一日欠席仕（候）とあり、九月には、三度にわたり、柔道着が無イノデ一時間見學シマシタと書いてある。柔道着が高くて父は買えなかつたらしい。こん

なわけで、体操学科の中の武術科目の成績は、五年間一度も、甲をもらえなかつた）。

第三部は、身體検査及び成績表、勤惰表（出欠のこと）の三つである。

通信簿の最後のページには、校歌が印刷されていた。「へ調四分ノ四拍子」とあり、楽譜は数字の記号で示されている。

「がくなんけんじしちひやくの」を

511-231.1.15.513-
中ナニヤ、マ、ビ、シヤ
2.11-201
マ、シヤ、ハ、ー

という記号で歌つたのである。——作詞者吉九一昌は「故郷を離るる歌」や「早春賦」（大正二年）で有名。

今年春のセンバツ二回戦で、静高は不調、絶対調の日南學園に敗れたが、それでも第一回戦に勝つて、私は久しぶりに「甲子園での校歌」を聞いた。静中が夏の甲子園で全国制覇を成しとげたのは、私どもの四年生の時である。その時のピッチャーは、上野（三年生）、キャッチャーが五年生の福島先輩であつたが、一

塁の國友はじめ、田崎・小河など四三回の同期が勝利の原動力になったのである。

追記

静中静高の校歌は通信簿の末尾に、第四連 御國の柱礎となりし祖先の後継ぎて

大現神天皇の 稜威を四方に輝かせもあつて、螢の光の第四連の「台湾の果も樺太も」と歌つた時代に相応している。これについては、機会を求めて述べることにしたい。

また、私は、関東の生まれ（栃木県今上市）であつて、十二歳の折、興津に移り住み、静中に入った年（大震災）秋から、寄宿舎生活をするはめ

静岡の万葉を歩く

(その十八)

51期 原崎 郁平

焼津市花沢の里に万葉歌碑が建っている。

焼津邊（やきつべ）に我（わが）行きしかば駿河なる阿倍の市道（いちじ）に

会いし子らはも

（巻三二八四）

昭和六十一年十一月建立
揮毫者 服部毅一

になった。静岡在住の五年間は、「懐しの寮生時代」を経験した。この時の思い出は、尽きることがない。これについても機会を求めて書き残しておきたい。

四三回の面々については、マメな世話役の西沢純三氏が事細かに紹介してくれている。平山桂、見原三郎が急逝、そのあとを追うように池谷三郎、熊切達治も他界した。池谷三郎は寮生の親しい仲間であつた。だんだん淋しくなる。

●倉澤さんは元文教大教授で日本国語教育学会会長として活躍。次号にも回想記などをぜひお願いしたいと思う。

建立者 焼津辺の会

大きさは高さ九十七センチ、幅百八十七センチの自然石に縦四十二センチ、横六十二センチの黒御影石で万葉仮名で書いてある。歌碑の裏には「大養孝先生の来焼を記念し万葉講演会聴講者外、有志三百十八名の拠金によりこの碑を建立する。揮毫 服部毅一 碑石提供者 村松登志雄 施工者 駒井常夫 建立 焼津辺の会（代表者 原川和雄） 昭

和六十一年十一月吉日」と彫られている。

歌の大意は「旅をしてこの焼津あたりに来た時に、安倍の市で出会った少女達が忘れられない」である。

この歌碑に行くには、国道一五〇号線を日本坂トンネル手前に流れる花沢川沿いに細い道を登って行くと、昔の東



海道に出る。そのさき、法華寺下の水車小屋の手前に「焼津」の歌碑がある。

焼津駅前に小泉八雲の文学碑がある。題名「焼津にて小泉八雲」本文「焼津といふこの古い漁師町は、日がカッとさすと、妙に中間色のおもしろ味が出てくる町だ。この

町が臨んでいる小さな入江、その入江に沿う白茶けた荒磯の色が、まるでトカゲのよう

な色をおびてくるから妙だ。町は、丸いゴロタ石を積み上げた異様な石垣で、荒い海から守られている。この石垣の

てっぺんから陸の方を眺めると、小さな町の全景がひと目で見渡される。灰色の瓦屋根

の広いひろがり、風雨にさらされて白茶けかえった家並。

そのあいだに、ところどころ松の木が茂っているのは、寺のある場所を示している。目を

転じて海の方を眺めると、これはまた紺波碧濤数マイル、いかにも雄大な眺めである。

はるかかなたの水平線をくつきりと劃っている。峨々たる

青い連峰はさながら紫水晶を置いたようで、そのむこうには、左の方に高く、四囲の山々

を圧して、富士の麗容が嶄然とそびえ立っている。久遠書

小泉八雲は、一八九七年八月焼津に来て山口乙吉方に滞在、一九〇一年八月来焼、一

九〇二年七月来焼二月滞在、一九〇四年八月来焼一カ月乙吉方に滞在している（一九〇四年九月二十六日逝去）。

慶喜さん

54期 居初 良雄

徳川慶喜は幕末の政変後水戸での謹慎を解かれて、明治2年9月より新封地の静岡へ移り、その後約30年にわたって外部との交渉を断ち、専ら自分の趣味のみに生きたということである。

昨年の同窓会報45号の記事で、静岡の人々は「よしのぶさん」ではなく慶喜さんと呼んで敬愛の念を示していた由、又「けいきさん」の発音は景気・不景気のそれではなく、お菓子子の「ケーキ」に近いものであったそう。

このことは、一敗地にまみれた最後の將軍に対して、温かく見守っていた静岡の人々の穏やかな風がよく表現されていると感心した。

昨年度のNHK大河ドラマは「徳川慶喜」であったが、

史実に詳しく、まことに興味が尽きなかった。この作品は

司馬遼太郎の「最後の將軍」に依るとあったが、終局の政

権返上（大政奉還）のあたりは、別の森鴎外の「西園伝」からの引用のようで、更に明

解になった。政権の返上は土佐藩からの上申もあったようであるが、慶喜は単なる返上ではなく、5年前のオランダ留学から帰国して幕府の開成所の万国公法の教授であった西周到幕府に代わる新しい時代の政治体形を至急に作成させた。

西が慶喜に提出した「議題草案」と題されたプランは「大君」という国家元首を頂点とした中央集権国家で、公府と称した中央官庁と議政院という上院・下院の議會を備えた近代的なものであった。

この大君が大統領に当たるわけで、適当な人が出るまでは、自分が務めてもよいと慶喜は考えていたようである。又、このプランでは天皇は象徴的な存在で、(1)法律と認定する（拒否権はない）、(2)年号を制定する、(3)度量衡を制定する、(4)爵位を与える、(5)宗教の長となる。となっている。

一方、倒幕派の岩倉具視らの新政府構想は「天皇の直接政治」を主張するだけで、I 總裁……有栖川宮、II 議定……仁和寺宮他公家5名、山内容堂他大名5名、III 参与……岩

倉具視他公家5名、薩摩藩他各藩15名という実に簡単なもので、慶喜の描いた構想には遠く及ばないものであった。

倒幕派は政権をとると、この慶喜の側の政権プランをそのまま踏襲した。ただ大君に当たるところに天皇を配置して、象徴的な「天皇」を削除してしまつたことになる。慶喜の希求した日本の近代化は、

それから約70年後、第二次大戦後の平和憲法の成立を俟たねばならないことになる。

慶喜は又、幕府の後ろのフランスと倒幕派の後ろの英・米らを巻きこむ無残な国内戦の愚を避けるための急速な敗戦の宣言は、どれだけ国と国民との財産と生命の壊滅的な被害を救ったかの功績の偉大さは、太平洋戦争末期の日本の軍事故の愚かさとは比べる

とよく分かる。

最も頑迷な水戸学の徳川齊昭の子に生まれながら、最も近代的な理性を持つ慶喜を理解できる人間は、当時ではまことに稀であったと推察される。

慶喜は静岡に隠棲してから船晦して、旧幕臣や新政府

の役人になった者たちにも会わなかった。会うのは一橋家の無官の実業家渋沢栄一と勝海舟ぐらいで、幕末の政治の回顧談を求める歴史家とも会うことは断わり続けた。しかし、毎日数紙の新聞は克明に読み続けていたという。

慶喜は明治30年11月に東京巢鴨に戻つて来た。

幕末の動乱もすでに「歴史の物語」になつていた。冷静になつて考えてみると慶喜の敷いた平和革命の路線の正しさ、改めて見直される状況になつた。「明治政府成立の最大の功績者は徳川慶喜ではあるまいか？」とひそかに考へる者も多くなつた。

その気運のなかで、明治31年2月9日に慶喜は参内をした。

慶喜がぶじ退出した翌日、天皇は伊藤博文をよび、「きのうは久しぶりに思がえしをしたよ」とわざとおどけて言つた。「なにしろ慶喜のもつていた天下をこちらがうばつたのだから」と司馬遼太郎は書いているが、これは単に政治権力を奪つたということだけでなく、先覚者としての

慶喜の苦勞して作りあげた新しい政權構想をはじめ、幕府の若い優秀な官吏や組織・設備をほとんど無傷で頂いてしまったので、早速に役に立つた、というようなニュアンスを私は感じてならない。

ともあれ慶喜さんは、あの混迷をきわめた幕末に、このような明快な解決の指針を示した第一級の近代的頭脳の秀才であると同時に、事件の決着を見た後は関連事項には黙して語らずをつらぬいた、そのダンディズムに改めて感嘆する次第である。

あこがれの ヒマラヤトレッキング

66期 石川 剣二

一年半ほど前、会報に「中高年登山」と題して、低山ハイキングを続けている現状を報告したことがある。今回はその続きといったもので、ネパールでのトレッキングに参加した山行記である。世界中のトレッキング愛好家がやってくるといわれるネパール。一度はそこを歩いてみたいと思つていた。われわれ66期は六十代も後半になり、年齢的

体力的に今年あたりが最後ではないか、それにいまごろは満開というシャクナゲの大本もぜひ見たいと、三月十五日から二十七日までのツアーに応募した。

一行は三組のご夫婦を含め男性六、女性十、添乗員を加え計十七人。大半が五十代後半から六十代の元氣な中高年ばかり。デリー、カトマンズを経由して十七日、ボカラに到着し、翌日からのトレッキングに備え、荷物の仕分けをした。ネパールには数多くのトレッキングコースがあるが、もっとも一般的なゴラバ二周回を歩く。

十八日。いよいよトレッキング開始だ。バスで出発地点のカレーに向かう。途中で一行のガイドを務める人、荷物を運ぶ人、料理をしってくれる人たち十四、五人と食料、寝袋などを次々バスに乗せていく。この日はアップダウンの山道を約三時間歩き最初の宿泊地ダンパス一、七八〇メートルに着く。アンナプルナサウス七、二一九メートルと魚の尾のマチャプチャレ六、九七メートルが大きく見える。

今回のツアーの宿泊はすべてロッジを利用した。簡単なベツドに寝袋を敷いて寝る。テント泊のグループが結構多いが、ロッジで寝る方がずいぶん休まる。

十九日はランドルン一、六四六メートルをめざす。標高は下がるが、途中約二、一〇〇メートルの山を越えるので三七〇メートル登つて、五〇〇メートルほど下ることになる。歩く道は住民の生活道路で、「ナマスデ(こんにちは)」と行き交う人と声を掛け合い石段、ほこりの多い土道を行く。各所にロッジ、休憩所があり、ひと休みして水、ジュースなどを買う。テント泊を続けながら下山中の元氣な日本人の団体と会つた。午後三時過ぎランドルンに着く。この日の行動時間は七時間余り。アンナプルナサウスがますます大きくなった。

二十日。期間中で最も厳しい日だという。朝七時出発。いきなり約三〇〇メートル、三十分ほど下る。小さな川を渡ると、今度は急な坂道を約二時間半登る。標高約二、〇〇〇メートルのレストランで

昼食。さらに登り続け午後三時三十分、宿泊地のタダパニ二、五九〇メートルに落後者もなく到着。行動時間八時間三十分。ここも各国からきたトレッカーでにぎやかだ。なかでもスウェーデン人の中年の女性が半ズボン、真っ赤なシャクナゲの花二つで髪を飾り、陽気にだれ彼なく話しかけていたのが人目を引いた。ソーラーによる温水シャワーを浴びたが、それほど温かくなく気温も低いため震えがあつた。ここは電氣がないので、夕食後は早々に寝袋に潜り込んだ。

二十一日。気温は一〇度以下で寒い。前日同様に二〇〇メートルほど下り、川を渡つたあと急登を一気に登る。土ほこりがひどい。シャクナゲが見え始めた。木の高さは十〜二十メートルはあるだろう。話に聞いていた通りシャクナゲの太木である。さらに登り続け約三、一〇〇メートルあたりで下りに入った。日本ではこの標高になると植物はハイマツ、小さな草花程度だが、ここでは空が見えないほどの樹林帯だ。シャクナゲがだん

だん多くなり、林を抜けると
広場に出た。広場が満開のシャ
クナゲの大木に囲まれ、遙か
遠くの山々も赤いシャクナゲ
の花で埋まっている。大きな
歓声。みごとなシャクナゲを
見て、苦しい登りの疲れも忘
れたよう。全員でシャクナゲ
をバックに記念写真を撮った
あと、シャクナゲ林を下り、

午後三時、ゴラパニ二、八六
〇メートルに着く。行動時間
七時間。気温はかなり低く食
堂は朝晩まきストーブに火が
入る。早朝屋外の水場は薄い
水が張る。

二十二日。日の出を見るた
め午前五時、真つ暗の中をヘッ
ドランプを頼りにプーンヒル
三、一九四メートルをめざす。
起きぬけ、空腹、三、〇〇〇
メートルを超す標高でかなり
苦しい登りだ。それでも一時
間で頂上に着く。六時二十分
日の出。どっしりしたダウラ
ギリ八、一六七メートルの山
頂が朝日を浴びる。アンナプ
ルナサウス、マチャプチャレ
はなにか小さくなった感じに
見えた。三六〇度展望の頂上
はかなりの広さにぎわい。
ニュージランドの国旗と

もに写真を撮るグループ、日
本人の団体も二つ三つ。七時
下山。この日は休養日で露店
で買物など一日をブラブラ
して過ごした。

二十三日。いよいよ下山だ。
ガイドが「雨になるかもしれ
ない」というので、翌日の迎
えのバスの乗り場にできるだ
け近くまで行こう、というこ
とになった。朝七時出発。石
段、土ほこり、つづら折りの
急坂を一気に下りに下った。
五、六人の若い男女の日本人
グループに何度か出会った。
春休みを利用二十五、六日間
の計画でインド、ネパールを
歩いているのだという。重い
荷物を背に乘せたロバの団
やヒツジの群れにしばしば出
会って道を譲りながら歩き続
け午後三時半、ビレタンティ
一、〇八〇メートルに着く。

行動時間八時間半で一、八〇
〇メートル近く下った。夕方
ポツポツと雨が落ちてきたが、
すぐにやんだ。スタッフとは
最後の夜になるので、サヨナ
ラパーティーを開いた。ここ
も電気はなく、カンテラの明
かりで飲み、歌い、踊り一週
間の楽しいトレッキングの最

後を締めくくった。

二十四日。八時出発。わず
か四十分歩いただけで、迎え
のバスと落ち合い、昼前ボカ
ラのホテルに戻った。一週間
ぶりにふろにつかり、汗とほ
こりを洗い落としさっぱりし
た。

二十五日観光、二十六日ヒ
マラヤ遊覧飛行で小規模に乗っ
た。あいにく雲が多く、機体
の揺れもひどく、肝心のエベ
レストが確認できず、写真も
これといったものが写せず、
料金二万円は高かった。昼過
ぎカトマンズからテリーへ。
夜の全日空でバンコク経由で
帰国、二十七日朝十時前に成
田に着いた。

六泊七日のトレッキングは、
考えていたよりも気楽に歩く
ことができた。急登といつて
も現地の人たちの生活道路な
ので、手を使って登るという
ような難所はなかった。それ
以上に空気が乾燥しているの
で、汗をかいても日本の山の
ように、シャツを絞るほどで
はなかったのも気楽に歩けた
理由だろう。参加者はい人
ばかりで、実に楽しい実り多
いトレッキングだった。

定年わっはっは

68期 大川 庄治

題記は朝日新聞土曜版夕刊
に記載されている連続記事の
タイトルである。われわれ定
年退職者にとつては最も関心
を持つてゐる記事なので、毎
回丹念に読んでゐる。三カ月
程前、この記事を読んでゐる
うちに、その投書者がどうや
ら現在私が通つてゐる学校の
卒業生で、母校のことを書い
てゐることに気がついた。そ
の母校とは東京農業大学成人
学校のことである。

私は在職中、総務担当だつ
たので、定年問題については
ことのほか関心が強かった。
或る日、三菱総合研究所発行
の雑誌を読んでいたら、定年
後の充実した生活を送るのに
どうしたらよいかという特集
記事が掲載されており、その
中に定年退職者向けの趣味と
実益を兼ねた学校の紹介があつ
た。私が興味をもつたのは都
の職業訓練学校（正式には高
等職業技術専門学校）の園芸科
と、前述の東京農業大学成人
学校とであつた。東京農大の
方はそれ以来十年間、毎年来
内書を送付してもらい、入学

のチャンスを狙つてゐた。

二年前、非常勤役員になり
会社には月に一、二回顔を出
すだけになったのを幸いに、
先ず立川にある職業訓練学校
の園芸科（都内ではここだけ）
を受けてみた。三十人の定員
に対してその八倍位の応募者
が集まつた。学科試験、体力
テスト、面接があり、第一回
目はものの見事に不合格となつ
た。面目ないと思つたから、
半年後に再度挑戦したらまた
落ちてしまつた。学科試験に
は相当自信を持ち、中学卒業
程度の数学の参考書も買つて
万全の準備を整えたが、わず
か三十分間に計算二十五問、
国語の書き取り、読み方三十
問をこなすのは、われわれ高
齢者にとつてはかなり厳しい
試験だというのがいつわりの
ないところである。

そこで次に目指したのが東
京農大の成人学校である。こ
こも最近の園芸ブームを反映
してか入学希望者が殺到し、
私は入学受付の日、夜の明け
やらぬうち校門前に一番乗り
をしてともかく入学すること
が出来た。

同校は園芸造園本科と専科
と健康増進コースに分かれ、

最大限十年間在籍することができ。授業は週一、二、三日で、午前中は講義、午後は実習で、教養科目として、書道、吟詠、短歌、茶道、絵画、華道等がある。授業は各部各学科の教授が専門分野の話を判りやすく教えてくれる。教授の顔ぶれが毎回変わるのが楽しみである。テレビによく出演する有名教授もいる。

われわれ生徒が特典として与えられているのは大学の施設の一部を自由に利用することができることである。例えば学生食堂で若い女子学生と一緒に食事できるのは楽しいし、何よりもうれしいのは大学図書館に入館し、圖書を自由に閲覧したり、借り出しでできることである。

しかし、何よりもわれわれ生徒に感動を与えるのは、収穫物を手にすることである。実習の成果が上がり、野菜や花が生徒全員に分配される時は子供のように歓声を上げて持ち帰る。

学校を卒業してからも学校と生徒、生徒同士の結びつきは強い。卒業生は学校で学んだ知識と経験を生かして、ボランティア活動を行なっている。

その一例として新宿御苑や、川崎緑化センター等で毎週休苑（園）日には剪定や草花の手入れをやっている。また年に数回ある国内、海外研修旅行に参加して、造園の研究も行なっている。そのほか、卒業生により在学中勉強した短歌、茶道、華道、絵画、書道等のクラブ約五十程が作られ、それぞれ活動を続けているが、このことはまさしく東京農大の意図している生涯教育が実を結んでいるものといえる。

弥勒菩薩と甲子園

70期 久澤 正雄

わが国第一号の国宝に指定された京都・広隆寺の弥勒菩薩像は、その端正な美しさによつてあまりにも有名ですが、昔一人の京大生が、その美しい顔に頬ずりしようと思つたとき、像の右手の指を折ってしまった事件があったことをご存知でしょうか。ご存知の方でもそれがいつのことか憶えておられる方はほとんどないと思います。しかし私は、それが昭和三十五年八月だったことを断言できるのです。

その年の夏、甲子園では、

わが静高が二年生の石田投手を擁して、対大社高戦を皮切りにつぎつぎと勝ち進み、決勝戦で法政二高と対決することになりました。私は当時大阪にいて、そのすべての試合を観戦しました。事件は決勝の数日前に起き、新聞・テレビでも大きく報道されました。また朝日新聞は大会開催中、横山泰三氏の高校野球に関する一齣漫画を連載していました。決勝当日の漫画は、石田投手と法政二高・柴田投手の活躍と事件を結びつけたもので、それへの共感とからかんで事件の起きた年月をハッキリ球場のみるくぼさつ事件先輩「ホオずりしてやりたいよ」選手「指を折らないでね」



横山 泰三

と憶えているのです。

今春、静高を応援に甲子園まで行きましたが、その前に漫画のことを思い出して、大磯の図書館で新聞の縮刷版を見たのですが、事件の記事はありませんが漫画はどうして見つからないのです。三十九年前ものこととはいえ、まさか私の思い違いとも思えず、ひよつとしたら新聞の東京版と大阪版で違うのではないかと気がついて、第一戦辛勝のあと京都の図書館でさがしたところ、果たしてその漫画も

同期生は今いずこに

83期 山本 雅敏

正直言つて私は静高時代をボーツと過ごしてしまつた人間の一入です。従つて、同期会で「一緒に大学受験に行つたじゃないか!」と言われても覚えていない有様です。そのような訳で友人と呼べる相手もあまりいませんでした。

さらに就職してから仕事であちこちを転々としたので、ますます同期生と縁遠くなつてしまいました。その数少ない中で、今でも「どこに居る

あつたのです。みなさんはおそらく、大阪版は見えておられないと思いますので、ここに紹介させていただきます（先輩たちがみな、角帽をかぶっているのが面白い）。

対法政二高戦は、今回の第二戦と同じく、投手は好投しましたが、味方の援護射撃がなく、スコアも奇しくも今回と同じ三対〇で敗退しましたが、またいつの日か、甲子園で静高の若者達が活躍するのを応援できたらなと思っています。

のだらうか? 何をしているのだらうか?」と気になるのがF君とM君です。

二人とも予備校まで一緒に行つた仲でしたが、大学は千葉、愛媛と別れて行きました。F君には予備校時代、大変お世話になり今でも忘れたことはありません。私が東京だったのでも在学中も何回か会つたのを覚えています。私が結婚してから女房を紹介するために彼のアパート（すでに結婚していた）へ行つたのも覚えていますが、しかし、私が仕事で外国に五年ほど赴任して、

追悼

株式会社東電電取締役会長
岩波信平氏は、平成10年12月22日肺炎のため逝去されました。享年89歳。葬儀・告別式は社葬として、11年1月22日午後1時から高野山東京別院で執り行なわれました。

静中静高関東同窓会42期幹事として長い間、尽力くださった岩波さん、総会・幹事会などいつでもお元気に乾杯の音頭をとってくださった岩波さん、心からご冥福をお祈り申し上げます。

岩波信平君を偲ぶ

42期 宮澤 次郎

長い間のお付き合いでしたが、岩波君の急逝、本当に万感胸に迫るものがあります。

明治四十二年四月十二日、貴族院議員、静岡名誉市長尾崎元次郎氏の三男に生まれた君と、四十二回生として静岡中学と一緒に卒業したのは昭和二年三月でした。

慶応大学法学部を卒業、鐘紡に勤務した君は、岩波藏三

郎氏の婿養子となられ、昭和二十五年養父の跡を継ぐため東電社に入社されました。

君は常に相手の身になって親切に友人と交わり、自らにはきびしくそして人に対しては温かく、よく面倒をみてくれました。



代表取締役専務から四十七年に社長就任、そして平成六年会長となられましたが一貫して流れる君の事業経営姿勢は、良き人間関係を築き、その基礎の上に事業の繁栄を図った真にヒューマニズム豊かなものであったと思います。

また、大正十四年静岡少年団の団員として山中湖の全国野営大会に参加されて以来、君ほどボーイスカウト運動を愛し、運動の真髄を多くの人々に教え続けた人はいないのでないでしょうか。ボーイスカウト日本連盟および東京連盟の役員として活躍し、藍綬

褒章・勲五等瑞宝章を受章されたことも思い出されます。

さらに、すぐれた音楽性を發揮されてきた君は、マーチングバンド連盟とバトントワリング連盟の副会長をつとめられ、また日本ビュジュアルバンドの会長として、その育成に尽力された功績は絶大だったと存じます。

私がトッパンムーア開業に際して社内にマーチングバンドを創設しようとして、君にご協力を仰いだ時も親切に指導してくださいました。現在は団員も百名、大いに活躍を続けていることはしみじみ嬉しく感じる次第です。

ここに謹んで君のご生前のご厚誼に対し深く感謝申し上げ、心からご冥福を祈るとともに、ご遺族皆さまの末永いご多幸をお祈りいたします。

荒井郁子さんを偲んで

90期 八木 美登子

もうすぐ卒業後四半世紀だと笑い合っていたのは、一昨年のことだったでしょうか。何かあった時には、悩みをきいてくれる友が、いつでもそ

ゝいるうちに音信不通になってしまいました。彼の住所も電話番号もいまだに紛失したままです。あれから20年近く経っていますから、以前の所には居ないでしょうし、仕事も変わっているかもしれません。一方、M君とのコンタクトは彼が愛媛へ行った段階で途切れてしまいました。私の記憶にあるのは、予備校時代、彼が思いを寄せた？女性（予備校の事務の女の子だと思っ）が出席する、地域の運動会に

第18回印高会ゴルフに優勝して

64期 神谷 武男

今回の印高会ゴルフは、戦前派がいう兵隊の位で言えば二等兵の番狂わせ、先の大相撲と同様の平幕優勝となり、並み居る将官、横綱級のシングルプレーヤーを嘆かせる結果となりました。

私は、町医者である晃（29期）を父に、33期水野成夫氏と56期清水逸郎氏の秀才二人を輩出した遠州佐倉村で生まれ、旧制の最後、新制の最初の卒業生となりました。校舎

一緒に連れられて行ったが、お目当ての子に会えなかったため、がっかりして帰ってきたこと。また、大学時代、彼の消息を聞くために実家へ行ったが誰も居なかったため諦めて帰ってきた、などです。住所も何もわからぬまま今日まで来てしまった訳です。

先に述べたように、全ては私の不甲斐なさから出た結果ですが、今日までずっと頭の中に未解決物件として残っています。二人は今いずこに！

は長谷町、住友、三菱の工場跡、城内の兵舎跡へと、下宿も同期の柳田宅から、恩師菱、眞重宅他六個所を転々とし、戦中の二年半は、銃（教練）、欽（勤労奉仕）、ハンマー、ヤスリ（工場動員）を手にする事が多かった特異の印高時代を過ごしました。

裸足での徒競走くらいで、道具を使うスポーツを知らない田舎育ちの私を、夢中にさせたのは、ソフトボールで、脱走し易い兵舎の教室を抜け出てやるほどになり、遂には職員室に呼び出され、八十島先生から説教される羽目とな

こにいると思っていた私に、あの日の突然の訃報は、あまりにも強烈なショックを与えていました。とり残されたという淋しさは今でも私につきまといまいます。

彼女との思い出は、静高の懐かしい学舎と切り離せません。一年生の水泳訓練で知り合いましたが、身も心もどっぷり一緒にいたというのは、高校三年の一年間程の短い間だったにもかかわらず、私にとつての永遠の友だと公言できるのは、あの頃の一日が、今の何十倍かのずっしりとした確かな重みをもっていたからでしょう。あの一年間、私たちは、休み時間に、学校の帰りに、よく笑い、それ以上によく泣きました。

静高での思い出のほとんどは、彼女とあります。だからこそ、今も私の中にある彼女の姿は、静高の制服を着てほえんでいるのです。

今回、心ならずも郁子さんを送る会を催すことになって、私も幹事の一人として、手元に寄せられた90期の皆さんの葉書の肉筆を読み、電話で懐かしい声をきくこともできま

した。そして、葉書の差出人を確かめるために、高校の頃のアルバムをひもとくことになり、薄れかけていた記憶が芋づる式に浮かび出してきて、この会が私にとつては卒業後二十五年という節目にあさわしい区切りの会になりました。これは、郁子さんの私に対する最後のプレゼントのように思えてなりません。



ここ数年間、私たちの間では、お互いの誕生日に花束が交わされてきました。夫や子供達にも忘れ去られていた私の誕生日を、郁子さんは覚えていてくれて、私を感激させたのです。二月二十六日、今年からあなたの誕生日はろうそく四十二本のまま、私も花束の贈り手を失いました。でも、郁子さんは、次元の違う世界で、私の誕生日をずうっと気づかい続けてくれることだろうと思います。

郁子さんが病氣と壮絶に戦っていた時、少しも知らず、一緒に苦しむことができなかったことが心のこりなのですが、それが郁子さんのやさしさと思ひ、あなたとのたくさんのあたたかい思い出を胸に、私はもう少し生きていきます。あと何年かして、その時が来たら、あの笑い顔で私を迎えに来てほしいと思います。そして私も負けないくらいに笑顔で答えるでしょう。来世でも、友達になりましょうねと。

~~~~~

昨年の十二月二十七日に、90期生であり小生の妻でもあった荒井郁子が、病のため天逝いたしました。年末というご多忙の時期にもかかわらず、奥澤徹会長、上杉重吉副会長ほか、諸先輩の方々が別れを告げる式にご参列くださいました。

また関東地区と静岡地区で行いました妻との別れに同期の90期生、計八十二名が関係してくださいました。皆さまに對し、ここに厚くお礼申し上げます。(90期 荒井千明)

りましたが、脱走兵に成功者は少なく、約二十名の悪童仲間(の例外は、富士越の野澤正憲位だと思っています)。

こうして野球やテニス等道具を使うスポーツに興味を倍加し、三十代後半でゴルフを知ったが、今から三年前に退職し、時間的余裕が生じた今日、ゴルフは道具を使う究極のスポーツの感をますます深くしています。

印高会ゴルフに初めて参加したのは、第10回からで、この時に定めた罰金該当第一号となる最下位が発点でした。

今回の様な事は、余程の好条件が重ならないと達成出来ず、先ずは初参加からの大タキで、第14回から幕尻りハンディとなっていた事。次に天候で人一倍寒がりな五枚重ねの厚着でスタートしましたが、近來稀な快晴無風で、次のホールから厚い二枚を脱ぎ、軽装でプレー出来た事。一番大きかったかも知れない第三は、パートナーで二人の優勝経験者に挟まれ、励まされた事で、第11回優勝者68期萩原君のライナーと前回優勝者佐野の大フライの後の力んだ末

のトップ気味打球を、遠く迄運んでくれた枯草の助力まで得た上に、私のせつかなショットを見て、随所で咥いてくれた、佐野の「早打ちマック」を耳にし、若干ゆっくり振れた事が、好結果になったと思います。

又、現在28回となっている64期ゴルフ会でも、唯一の優勝経験が今回と同じ、第18回のもので忘れ得ぬものとなりました。

米寿を迎えられた今回迄、欠かさず参加される43期西澤先輩。私の目標である百を切る事を、喜寿を迎えられても、古稀を過ぎてても続けられている大石前会長(53期)と奥沢新会長(59期)の腕前に感服させられておりますが、参加出来る事は、家族近親を含めた健康と、時間的余裕に、或る程度の経済的背景のある証で、大いに感謝すべきであると言った同期の言葉をかみしめながら、本当に春の様だったバラ色の一日を過ごさせていただいた事に感謝しながら、今回だけは百軒余離れた我が家を遠いとも思わず、箱根の山を後にしました。



## 平成10年度 会費拠出者

平成10年4月1日〜11年3月31日  
(順不同、敬称略、寄付金を含む。  
年会費三千円拠出の方は、数字の  
記載はありません。)

43 吉江誠一、長戸寛美、西沢純  
三、三宅静雄、倉澤栄吉

44 高橋真一、臼井 茂

45 下川 猛、田附敏三、鈴木弥  
門(10)、伊藤敬三、蝦原一郎

46 鼠入秀夫、田中修三、篠原  
清(6)、内山 規、杉本義明

47 田中達夫、山上信重、杉山栄  
一(2)

48 大橋廣世、原崎進一(6)、近  
藤希賢、黒水高典、岩崎鑑一  
(2)、青木 香

49 長井 廣、大津英輔

50 田中 誠、大庭富士夫(6)、  
九尾文治、峰田静夫、稲葉亜  
紀

51 原崎郁平(6)、森 弘、佐伯  
正剛、林 盛次(6)、渡辺  
功(6)、鈴木孝雄、寺尾利男

52 茂呂茂樹、田中貞司(6)、西  
田豊馬(4)、服部雅雄、大草  
知久(6)、川島喜八郎、直原

澄衛、綾部立一(6)、市川雄  
八郎、石野浩一、小川善次郎  
(2)

53 志田寿一、橋本久仁寿、望月

54 昂、山菅章雄、大石 巖(12)、  
宗像 醇(6)、片桐鎮夫(6)、  
小野一夫(5)、月見里得知郎、  
徳永悠久、桜井昌也、三枝正  
裕、香林竹男

55 高井 昂、大畑忠夫、佐野資  
郎、柴崎芳三、渡辺治郎、安  
東哲夫、大藤直久

56 小沢忠樹、松井保治(6)、堀  
江重遠(6)、中野治良(6)、  
法月重雄、峰田 陟、相川富  
士雄、戸塚正五、山下武男、  
青木道生、山本孫一、日比孝  
明

57 北村 甫(11)、村田大八郎、  
鈴木源一、石塚由雄、清水逸  
郎、萩原達雄(6)、橋本保一、  
横森 桂、松田光彦(2)、伊  
東卓爾

58 原川久雄、望月 修(6)、藤  
巻重男(6)、坂田秀雄、米沢  
正次(6)、山中孝二、月見里  
礼次郎(12)、杉山正友、酒井  
博(5)、岩井平一郎、菅 稔、  
影島利邦(6)、島根光明、岡  
田淳己、大島隆夫(2)、鈴木  
明(2)、加藤健三、富田 澄、  
渡辺武男

59 世古真臣、島村 悟、萩原義  
臣、原木睦雄、伊藤健三、鈴  
木栄三、天野国明、宮崎佐一  
郎、須山静夫(6)、望月恵一

60 原 淳、長谷川邦三、菅原  
操、清水 汪、水野哲也(2)、  
近藤陽三(6)、増田真一、伊  
藤光雄、藤川礼司、富永利夫  
(6)、小澤武彦、田沢義彦、  
奥沢 徹、小花敏郎、加藤恵  
一、内田武二、三輪 潔、本  
田 豊、佐野英一、大塚 恒、  
勝呂 清、狩野和男、大村和  
夫、小沢将男

61 上杉重吉(6)、渡辺 博、大  
石隆一、君島康弘(6)、新聞  
昌輝、原田龍二、益田要一、  
笠間達男(5)、堤 崇、山本  
雅之助、石関忠雄、黒田武之  
助(6)、野沢栄司(6)、井出  
裕雄、時田正康、井田 淳、  
鈴木光男、小林金次、逸見昭  
三、鈴木 明、池上晴介(6)、  
内藤敏夫

62 大石次男、高山秀男、清水照  
彦(6)、稲森慎二(6)、花見  
久(6)、八木貞二、濱田茂明、  
片桐 篤、芹沢博樹、君島敏  
男(2)、萩原将弘、高村岳史  
(6)、西田駿之介(5)、仲野  
辰男、大村富士男、青木邦彦、  
鈴木 孝、天野 昭

63 柴田有年、吉川隆士、高田桂  
造

64 狼谷秀雄、田中 耿、名波倉  
四郎(2)、井戸良輔、増田誠

65 男、野沢正恵、新井 彰、渡  
辺宏一、蛭川博之、鈴木明郎  
(6)、大石和夫、山本和彦、  
浅井幹夫(2)、岩本吉雄(2)、  
小倉磐夫(2)、神谷武男(2)、  
佐野 旭(2)、竹内 豊(2)、  
塚本光彦(2)、仲野 実(2)、  
永田進一(2)、長島 健(2)、  
長谷川直和(2)、益頭尚文  
(2)、松下一男(2)、望月康  
逸(2)、村上嘉代(2)、八  
木綱三(2)、柳田 堯(2)、  
吉井駿亮(2)、栗田行雄(2)  
安池智策、川合 勉、原野谷  
朋司(6)、馬越 峻(6)、西  
田尚史、大村敏夫、増井和夫、  
中村伸吾、内田幸雄、杉本幸  
貞、田中俊男、永島秀次郎  
(2)、濱田裕志(4)、武藤  
勇、小嶋清司、大坪信之、三  
原 載、菊田聡裕、湯浅 謙、  
内田幸雄、山下裕一、加藤  
昭、村松武司、増井和夫、戸  
塚純一、山梨裕司、佐野栄一  
(2)、瀬尾 章

66 成岡英彦、丸山英久(6)、小  
沢峻二、福原亨一、手塚重明、  
牧田仁男、増田安国、遠藤一  
彦、稲葉昌弘、梶原由三、美  
濃一朗(6)、大森恵吉、矢部  
隆、川上剛二、黒田秀幸、岡  
村英二郎、小杉 弘(6)、塩

67 男、野沢正恵、新井 彰、渡  
辺宏一、蛭川博之、鈴木明郎  
(6)、大石和夫、山本和彦、  
浅井幹夫(2)、岩本吉雄(2)、  
小倉磐夫(2)、神谷武男(2)、  
佐野 旭(2)、竹内 豊(2)、  
塚本光彦(2)、仲野 実(2)、  
永田進一(2)、長島 健(2)、  
長谷川直和(2)、益頭尚文  
(2)、松下一男(2)、望月康  
逸(2)、村上嘉代(2)、八  
木綱三(2)、柳田 堯(2)、  
吉井駿亮(2)、栗田行雄(2)  
安池智策、川合 勉、原野谷  
朋司(6)、馬越 峻(6)、西  
田尚史、大村敏夫、増井和夫、  
中村伸吾、内田幸雄、杉本幸  
貞、田中俊男、永島秀次郎  
(2)、濱田裕志(4)、武藤  
勇、小嶋清司、大坪信之、三  
原 載、菊田聡裕、湯浅 謙、  
内田幸雄、山下裕一、加藤  
昭、村松武司、増井和夫、戸  
塚純一、山梨裕司、佐野栄一  
(2)、瀬尾 章

68 澤 満(6)、溝口淑郎、朝倉  
勇、岩崎為明、小杉謙一、戸  
塚惣雄、吉野 亨、向井久和  
鈴木俊彦、雨宮明生(4)、杉  
山忠男、萩原多賀男、市原  
卓、瀬堂川徹、藤波真五(5)、  
荒谷じつ子、瀬口寿一郎、岩  
瀬順郎、塚本浩司、河口 浩  
(6)、酒井定子、植田勇夫、  
星野敏郎、大場正己、松下司  
郎、小林功典、秋山和也(2)、  
武光康之(2)

69 大草敏郎、白石通子、大地不  
二雄、斎藤晴彦、渡辺勝美、  
宮代省一、三木 卓、北村  
孝、中村龍二、味岡 宏、松  
永 茂、関 哲男、石山 博、  
清水令一郎、川端正良、市川  
三世史、吉田 修、遠藤和夫  
(9)、坂本 康、久沢正雄、  
庵原英男、村松勝治、大長  
智、横山元二、鈴木明次、村  
上雅一(2)

70 渡辺敏美(6)、今村清彦、林  
洋石、児玉文男、山崎恭弘、  
青木庄二郎、加藤祐史(9)、  
富野 寿(6)、本間啓司、浦  
田 彰(6)、小池啓治(6)、  
実石欣哉(6)、諏訪逸郎、海  
野幸雄、渡辺 弘(6)、後藤

71 男、野沢正恵、新井 彰、渡  
辺宏一、蛭川博之、鈴木明郎  
(6)、大石和夫、山本和彦、  
浅井幹夫(2)、岩本吉雄(2)、  
小倉磐夫(2)、神谷武男(2)、  
佐野 旭(2)、竹内 豊(2)、  
塚本光彦(2)、仲野 実(2)、  
永田進一(2)、長島 健(2)、  
長谷川直和(2)、益頭尚文  
(2)、松下一男(2)、望月康  
逸(2)、村上嘉代(2)、八  
木綱三(2)、柳田 堯(2)、  
吉井駿亮(2)、栗田行雄(2)  
安池智策、川合 勉、原野谷  
朋司(6)、馬越 峻(6)、西  
田尚史、大村敏夫、増井和夫、  
中村伸吾、内田幸雄、杉本幸  
貞、田中俊男、永島秀次郎  
(2)、濱田裕志(4)、武藤  
勇、小嶋清司、大坪信之、三  
原 載、菊田聡裕、湯浅 謙、  
内田幸雄、山下裕一、加藤  
昭、村松武司、増井和夫、戸  
塚純一、山梨裕司、佐野栄一  
(2)、瀬尾 章

72 成岡英彦、丸山英久(6)、小  
沢峻二、福原亨一、手塚重明、  
牧田仁男、増田安国、遠藤一  
彦、稲葉昌弘、梶原由三、美  
濃一朗(6)、大森恵吉、矢部  
隆、川上剛二、黒田秀幸、岡  
村英二郎、小杉 弘(6)、塩

73 男、野沢正恵、新井 彰、渡  
辺宏一、蛭川博之、鈴木明郎  
(6)、大石和夫、山本和彦、  
浅井幹夫(2)、岩本吉雄(2)、  
小倉磐夫(2)、神谷武男(2)、  
佐野 旭(2)、竹内 豊(2)、  
塚本光彦(2)、仲野 実(2)、  
永田進一(2)、長島 健(2)、  
長谷川直和(2)、益頭尚文  
(2)、松下一男(2)、望月康  
逸(2)、村上嘉代(2)、八  
木綱三(2)、柳田 堯(2)、  
吉井駿亮(2)、栗田行雄(2)  
安池智策、川合 勉、原野谷  
朋司(6)、馬越 峻(6)、西  
田尚史、大村敏夫、増井和夫、  
中村伸吾、内田幸雄、杉本幸  
貞、田中俊男、永島秀次郎  
(2)、濱田裕志(4)、武藤  
勇、小嶋清司、大坪信之、三  
原 載、菊田聡裕、湯浅 謙、  
内田幸雄、山下裕一、加藤  
昭、村松武司、増井和夫、戸  
塚純一、山梨裕司、佐野栄一  
(2)、瀬尾 章

74 成岡英彦、丸山英久(6)、小  
沢峻二、福原亨一、手塚重明、  
牧田仁男、増田安国、遠藤一  
彦、稲葉昌弘、梶原由三、美  
濃一朗(6)、大森恵吉、矢部  
隆、川上剛二、黒田秀幸、岡  
村英二郎、小杉 弘(6)、塩

75 男、野沢正恵、新井 彰、渡  
辺宏一、蛭川博之、鈴木明郎  
(6)、大石和夫、山本和彦、  
浅井幹夫(2)、岩本吉雄(2)、  
小倉磐夫(2)、神谷武男(2)、  
佐野 旭(2)、竹内 豊(2)、  
塚本光彦(2)、仲野 実(2)、  
永田進一(2)、長島 健(2)、  
長谷川直和(2)、益頭尚文  
(2)、松下一男(2)、望月康  
逸(2)、村上嘉代(2)、八  
木綱三(2)、柳田 堯(2)、  
吉井駿亮(2)、栗田行雄(2)  
安池智策、川合 勉、原野谷  
朋司(6)、馬越 峻(6)、西  
田尚史、大村敏夫、増井和夫、  
中村伸吾、内田幸雄、杉本幸  
貞、田中俊男、永島秀次郎  
(2)、濱田裕志(4)、武藤  
勇、小嶋清司、大坪信之、三  
原 載、菊田聡裕、湯浅 謙、  
内田幸雄、山下裕一、加藤  
昭、村松武司、増井和夫、戸  
塚純一、山梨裕司、佐野栄一  
(2)、瀬尾 章

76 成岡英彦、丸山英久(6)、小  
沢峻二、福原亨一、手塚重明、  
牧田仁男、増田安国、遠藤一  
彦、稲葉昌弘、梶原由三、美  
濃一朗(6)、大森恵吉、矢部  
隆、川上剛二、黒田秀幸、岡  
村英二郎、小杉 弘(6)、塩

77 男、野沢正恵、新井 彰、渡  
辺宏一、蛭川博之、鈴木明郎  
(6)、大石和夫、山本和彦、  
浅井幹夫(2)、岩本吉雄(2)、  
小倉磐夫(2)、神谷武男(2)、  
佐野 旭(2)、竹内 豊(2)、  
塚本光彦(2)、仲野 実(2)、  
永田進一(2)、長島 健(2)、  
長谷川直和(2)、益頭尚文  
(2)、松下一男(2)、望月康  
逸(2)、村上嘉代(2)、八  
木綱三(2)、柳田 堯(2)、  
吉井駿亮(2)、栗田行雄(2)  
安池智策、川合 勉、原野谷  
朋司(6)、馬越 峻(6)、西  
田尚史、大村敏夫、増井和夫、  
中村伸吾、内田幸雄、杉本幸  
貞、田中俊男、永島秀次郎  
(2)、濱田裕志(4)、武藤  
勇、小嶋清司、大坪信之、三  
原 載、菊田聡裕、湯浅 謙、  
内田幸雄、山下裕一、加藤  
昭、村松武司、増井和夫、戸  
塚純一、山梨裕司、佐野栄一  
(2)、瀬尾 章

78 成岡英彦、丸山英久(6)、小  
沢峻二、福原亨一、手塚重明、  
牧田仁男、増田安国、遠藤一  
彦、稲葉昌弘、梶原由三、美  
濃一朗(6)、大森恵吉、矢部  
隆、川上剛二、黒田秀幸、岡  
村英二郎、小杉 弘(6)、塩

79 男、野沢正恵、新井 彰、渡  
辺宏一、蛭川博之、鈴木明郎  
(6)、大石和夫、山本和彦、  
浅井幹夫(2)、岩本吉雄(2)、  
小倉磐夫(2)、神谷武男(2)、  
佐野 旭(2)、竹内 豊(2)、  
塚本光彦(2)、仲野 実(2)、  
永田進一(2)、長島 健(2)、  
長谷川直和(2)、益頭尚文  
(2)、松下一男(2)、望月康  
逸(2)、村上嘉代(2)、八  
木綱三(2)、柳田 堯(2)、  
吉井駿亮(2)、栗田行雄(2)  
安池智策、川合 勉、原野谷  
朋司(6)、馬越 峻(6)、西  
田尚史、大村敏夫、増井和夫、  
中村伸吾、内田幸雄、杉本幸  
貞、田中俊男、永島秀次郎  
(2)、濱田裕志(4)、武藤  
勇、小嶋清司、大坪信之、三  
原 載、菊田聡裕、湯浅 謙、  
内田幸雄、山下裕一、加藤  
昭、村松武司、増井和夫、戸  
塚純一、山梨裕司、佐野栄一  
(2)、瀬尾 章

80 成岡英彦、丸山英久(6)、小  
沢峻二、福原亨一、手塚重明、  
牧田仁男、増田安国、遠藤一  
彦、稲葉昌弘、梶原由三、美  
濃一朗(6)、大森恵吉、矢部  
隆、川上剛二、黒田秀幸、岡  
村英二郎、小杉 弘(6)、塩

81 男、野沢正恵、新井 彰、渡  
辺宏一、蛭川博之、鈴木明郎  
(6)、大石和夫、山本和彦、  
浅井幹夫(2)、岩本吉雄(2)、  
小倉磐夫(2)、神谷武男(2)、  
佐野 旭(2)、竹内 豊(2)、  
塚本光彦(2)、仲野 実(2)、  
永田進一(2)、長島 健(2)、  
長谷川直和(2)、益頭尚文  
(2)、松下一男(2)、望月康  
逸(2)、村上嘉代(2)、八  
木綱三(2)、柳田 堯(2)、  
吉井駿亮(2)、栗田行雄(2)  
安池智策、川合 勉、原野谷  
朋司(6)、馬越 峻(6)、西  
田尚史、大村敏夫、増井和夫、  
中村伸吾、内田幸雄、杉本幸  
貞、田中俊男、永島秀次郎  
(2)、濱田裕志(4)、武藤  
勇、小嶋清司、大坪信之、三  
原 載、菊田聡裕、湯浅 謙、  
内田幸雄、山下裕一、加藤  
昭、村松武司、増井和夫、戸  
塚純一、山梨裕司、佐野栄一  
(2)、瀬尾 章

82 成岡英彦、丸山英久(6)、小  
沢峻二、福原亨一、手塚重明、  
牧田仁男、増田安国、遠藤一  
彦、稲葉昌弘、梶原由三、美  
濃一朗(6)、大森恵吉、矢部  
隆、川上剛二、黒田秀幸、岡  
村英二郎、小杉 弘(6)、塩

83 男、野沢正恵、新井 彰、渡  
辺宏一、蛭川博之、鈴木明郎  
(6)、大石和夫、山本和彦、  
浅井幹夫(2)、岩本吉雄(2)、  
小倉磐夫(2)、神谷武男(2)、  
佐野 旭(2)、竹内 豊(2)、  
塚本光彦(2)、仲野 実(2)、  
永田進一(2)、長島 健(2)、  
長谷川直和(2)、益頭尚文  
(2)、松下一男(2)、望月康  
逸(2)、村上嘉代(2)、八  
木綱三(2)、柳田 堯(2)、  
吉井駿亮(2)、栗田行雄(2)  
安池智策、川合 勉、原野谷  
朋司(6)、馬越 峻(6)、西  
田尚史、大村敏夫、増井和夫、  
中村伸吾、内田幸雄、杉本幸  
貞、田中俊男、永島秀次郎  
(2)、濱田裕志(4)、武藤  
勇、小嶋清司、大坪信之、三  
原 載、菊田聡裕、湯浅 謙、  
内田幸雄、山下裕一、加藤  
昭、村松武司、増井和夫、戸  
塚純一、山梨裕司、佐野栄一  
(2)、瀬尾 章

84 成岡英彦、丸山英久(6)、小  
沢峻二、福原亨一、手塚重明、  
牧田仁男、増田安国、遠藤一  
彦、稲葉昌弘、梶原由三、美  
濃一朗(6)、大森恵吉、矢部  
隆、川上剛二、黒田秀幸、岡  
村英二郎、小杉 弘(6)、塩



- 73 青木俊一郎、赤木政夫、有光一郎、安藤順男、飯田征四郎、石川博己、石川八洲夫、石割浩司、伊藤彰彦、大石堯史、大村康平、大村春樹、大村博、奥村至朗、後藤 宏(6)、小柳忠義、小山武夫、近藤守、三枝通康、齊藤幸男、榊原由之、佐々木勝彦、柴山欽伍、杉山正三、杉山親司、杉山 光、鈴木久弥、鈴木 齊、鈴木 豊、鈴木良明、富田彬道、仲川信正、中西英二(6)、西本昇平、羽山 武、牧野昭雄、松下勝朗、松永文夫、三浦英夫、武藤至輝、宗像純司、望月 智、山下茂支、山中博司、山梨由記、山本健史、山本昌秀、鷲巢丞男、渡辺雅俊、山梨泰司、後藤孝子(6)、飯野 理、池ヶ谷章、石川征四郎、石川久男、大河内久、大原順治、加藤 甫(6)、加藤 元彦、君島武男、小林篤夫、塩津 浩、柴田 隆、清水純、杉山洋司、鈴木智彦、関悦男、永井敏夫、中野敦夫、萩原 修(6)、服部信司、原崎幹雄、深沢靖男(6)、松永烈、山崎智弘、山本一雄、飯塚迪子、麻生貞敏、阿部有倫、塩坂雅司、田中重穂、前田修、望月 篤、和田武郎、彦坂忠俊、大木 茂、豊田智子、桑原敏久、鈴木千秋、佐野捷造、山口雅子、稲葉一宇、井鍋正良、大嶽隆司、井出宏嗣、佐藤鐘司、佐野 茂、花本栄二(5)、藤原経史(9)、松下晴一(5)、角谷治子、木村 敦、桑原英明、桑原伊玖子、岩崎匡利、佐藤薫郷、塚本 豊
- 74 佐藤修二、鈴木正孝、今田肇、小栗悠詞、大島崇志、鈴木 浩、藤巻庸男、伊藤達雄、三浦位通、栗田収司、仁科光司、野方重人(5)、山上輝重、柳川信子、清水雅尚、後藤嘉代、大村信子、飯田善久、増田洋美、村松貴彦、大岩 蓮(2)、深山源一、岡本天晴、藤田武敏、小長井奎幸、加藤重信、坪井孝夫、鈴木藤男、五十嵐誠(6)、小田島鏡子(2)、石井博之、奥山和子、君島正夫(2)、田中 穰(10)、多田佳忠、鈴木 勝、入谷健彦、水上俊彦(6)、鈴木真男、堀内淳司(6)、中村孝昭(5)、石垣隆夫、鈴木?、浅井隆善、勝又徳明、杉山順一、水越伸昭、竹下晴久、吉野文江、塩谷 立(6)、小沢治夫(6)、鈴木敏正、越部 薫、柳沢正芳、磯谷修平、池田幸司、北條正裕、栗林 貢、牧野英敏、ナシ
- 75 猿木和久、石川嘉和、浅羽伸人、山本章子、塩川治郎(6)、平岩正史、石渡洋行、箕輪陽一郎、平岡孝子、田中育恵、伊藤靖郎(5)、鳥巢 修、新村暢宏、栗山伸一、川島雅行(6)、スミス京子、丸尾啓敏(6)、山梨孝子、松田とも子、遠藤薫、村松秀明、川村朱美、岡村幸彦(5)、田中 元、大石修一、小山田潔、松野敦子、小池一徳、佐々木美登里、石崎秀和、三輪和範
- 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100 101 102 103 104 105 106 107 108 109 110 111 112 113 114
- 永江総宜(6)、石井克昌、ナシ、ナシ、重村 武、杉山眞之(6)、望月洋伸、五十嵐 寧(6)、佐藤弘幸(6)、佐藤友男、萩原さほり、齊藤光美(6)、小泉輝武、神田 理、川上 勤(6)、宮城鳥一彦(2)、松下高之、山内富美子、寺尾貴世、吉田幸弘、岡田真理、河合一慶、杉山強史、増井健、正野菜緒、鈴木健太郎、落合優希、野々本直子

### ◎事務局へのご連絡は:

〒153-0051 目黒区上目黒2-18-13

山中ビル タカラ歯科医院内

静中・静岡関東同窓会

薬科名雄(87期)

(電)〇三三三九二一三五八〇

(午後1時~10時の間)

### ◎事務局より

関東同窓会の円滑な運営のため平成11年度年会費(三千元)の納入をよろしくお願いいたします。

同封の振込用紙で、ぜひぜひご協力ください。なお用紙は会報の毎号に年会費の納入済み、未納にかかわらず同封しておりますことご諒承ください。

宛先不明のため、会報返送が毎号多数あります。住所変更の場合至急ご一報のほど願ひあげます。

### 「会報」編集子より

毎号バラエティーに富んだ原稿を寄せてくださる方々に、心から感謝申し上げます。

同窓会員の絆をより強くとの願いをこめて、さらにより充実した誌面になるよう、一層のご協力をお願いいたします。

◎各期幹事諸兄姉のご尽力で同期会を開催し、その報告を会報にのしどしご寄稿ください。

◎原稿尊重を建て前としておりますが、加筆や訂正させていたいただく場合もあります。

◎提供の写真について、返却の必要があるかどうか書き添えていただければ幸いです。

◎原稿依頼や掲載広告について、候補と思われる方を事務局までお知らせくださいますようお願いいたします。

(U)



## 鈴 与 株 式 会 社

取締役社長 鈴 木 通 弘 (76期)

清水市入船町11-1

TEL 0543 (54) 3015 (秘書課)

京浜支社 東京都港区芝公園1-2-12

TEL 03 (3432) 7151



## 新日本証券

相談役 大 石 巖 (53期)

本店 / 東京都千代田区神田駿河台3-11

☎ 03 (3219) 1111

建設コンサルタント・設計旅行業務  
建築に関する御相談は御気軽に……

## 株式会社 大 雄

取締役会長 奥 野 孝 (53期)

本社 東京都台東区東上野2-18-7 共同ビル10階

TEL 03-3834-5331 (代表)

## 日本レーベル印刷株式会社

代表取締役 岩 井 平一郎 (57期)

本 社 静岡市国吉田3丁目1番1号

TEL 054 (262) 1111 (代)

東 京 中央区京橋1-1-6 越前屋ビル8F

TEL03 (3272) 4651 (代)

自動車・電機部品の自動塗装及びシルクスクリーン印刷

## 株式会社 勝山塗装工業所

代表取締役 奥 澤 徹 (59期)

本 社 横浜市瀬谷区橋戸3-25-6

Tel 045-301-5545 FAX 045-301-5547

大和工場 大和市深見3706-1

Tel 0462-62-0340 FAX 0462-62-0343

東松山工場 東松山市新郷88-47

Tel 0493-24-2511 FAX 0493-24-2513

## 株式会社 富 士 越

## 株式会社 富士越化成

代表取締役 野 澤 正 憲 (64期)

東京都渋谷区東2-14-9

TEL (3409) 3342 (代)

TEL (3400) 9541 (代)

自動車・火災・傷害保険  
比べて下さい。安く確かな保険を。

## 大高保険事務所

代 表 清 水 雅 尚 (77期)

渋谷区東3-15-8

TEL 3406-9350

PHS 050-103-8920

同窓会で人の輪を!!

## 野方重人法律事務所

弁護士 野 方 重 人 (77期)

〈事務所〉

〒101-0045 千代田区神田鍛冶町3-7-3

蔵下ビル6階

(TEL) 03-3251-2348

(FAX) 03-3257-0820

♪ 昼2時より夜11時まで診療 ♪

## タカラ歯科診療所

代 表 フラ シナ フキ オ  
藁 科 名 雄 (87期)

東横線 中目黒下車徒歩5分

TEL 0120-376480

調剤薬局……首都圏に28店舗。

## 株式会社 アイセイ薬局

「医薬分業は 弊社へどうぞ」

代表取締役 岡 村 幸 彦 (93期, 応援指導部)

東京都中央区日本橋蛸殻町2-14-5

TEL 03-5643-8225

E-mail okamura @ aisei.co.jp